

「努力したこと」についての回想的記述の分析：日中比較

清泉女学院大学 高 崎 文 子
清泉女学院大学 東 洋

Analysis of Retrospective Description of “Efforts”: Comparison between Japan and China

SEISEN JOGAKUIN College TAKASAKI Fumiko
SEISEN JOGAKUIN College AZUMA Hiroshi

本研究では「努力したこと」についての自由記述のスク립トの特徴を分析することで、文化間と文化内グループにおける「努力」スク립トの差異と共通点を明らかにすることを目的とした。日本と中国というアジア文化圏に属する二国を対象にし、さらに学生とその親世代という文化内における2つの属性グループを対象とした。

スク립トの分析の結果、日本と中国では、努力について何を記述するかという内容の選択に違いがあるが、努力についてどのように表現するかという記述の様式は比較的類似していることがわかった。さらに、記述の内容の違いについては、学生においては二国間の差が顕著であったのに対して、親世代においては二国間の差はほとんどなかったことから、単純に二国間の差だけや世代の差だけを文化の差として捉えることは適切でないことが明らかになった。

【キーワード】 努力したこと、記述の内容、記述の様式、日中比較

In this study, it was examined how cultural differences between Japan and China and between university students and their parents are related to retrospective descriptions of “efforts”.

As a result, in terms of the contents of descriptions, Chinese parents and Japanese parents showed a similar trend while there was a distinctive difference between Japanese students and Chinese students. Regarding the styles of descriptions, there was no noticeable difference between countries and between generations.

This revealed that sufficient understanding could not be gained about cultural difference merely through simple comparison between two countries.

【Key words】 description of effort, contents of descriptions, styles of descriptions, comparison between Japan and China

はじめに

動機づけ研究においては、人の行動を動機づけを、行動主体の内的な状態（欲求の量など）や認知的な特性から説明しようとする研究が多い。しかし、人が行動を起こすのは、周囲の状況から全く切り離された状況の中で、個人内の状態だけに影響を受けてのこととは考えにくい。また周囲から影響を受ける場合も、その場における刺激への反応といった短期的なものだけに限らず、長期的な経験によって動機づけられる行動もあると考えられる。

D' Andrade (1992) は、社会や文化で共有されている目標は、達成する価値のある目標とされ、そこに所属する人はその目標達成へ動機づけられると述べている。たとえば、学校や幼稚園における教室内で価値ある行動として共有されている目標は、その教室に所属する子どもたちの動機づけに影響を与えることが示されている（中谷 1996, 高崎 2003）。これは子ども自身が、その教室内におけるさまざまな経験をとおして、どのような行動が望ましいとされているのか、どのように行動するべきなのか、ということを価値や規範として取り込むからだと考えられる。

東 (1997) は、社会的・文化的経験を通じて人々が獲得する、物語のパターンや認知的枠組みを「文化的スクリプト」と呼んでいる。人は、出来事が一般的にどのように発生し、経過し、結末を迎えるのかという知識、つまり出来事についてのスクリプトを持っている。このスクリプトは、起こった出来事の解釈や評価（「出来事はこうなるべきであった」など）にも用いられるし、これから起こる出来事の予測（「出来事はこうなるであろう」）や自らの行動の選択（「このように行動するのが自然であるからこうしよう」など）にも影響する。東 (1999) によると、スクリプトのレパートリーは個人の経験や、仲間の話や、教育や、文字、映像媒体などによる文化学習を通じて形成される。また、文化的スクリプトには経験による個人差があるが、経験や文化的刺激を共有していればそのレパートリーの共通性が高くなり、文化刺激が異なる文化圏に属する人は異なるレパートリーを有する可能性が高いという。

以上のことから真島 (1998) は、日本とアメリカという二つの文化における達成動機づけの目標構造の違いを明らかにするため「目標を持って努力したこと」についての作文課題を用いた調査を行った。作文課題を用いたのは、人が属する文化内の「話の筋」つまり文化的スクリプトを捕らえることが可能であると考えられたからであった。この研究の結果、アメリカの学生は日本の学生に比べて達成の結果を記述する傾向があり、日本の学生は努力のプロセスやそのときの気持ちについて描写する傾向があることが示された。真島 (1998) はこの違いの説明として、「努力したこと」として何を伝えるべきかという情報に関する価値判断の違いが反映されていると述べている。

北山 (1997) は、心理学的調査を行う際の「刺激」が等価でないことこそが文化と心の相互構成過程を示していると述べているが、「努力」という一見同じ「刺激」への異なる反応は、その文化では何を努力として認めているか、何を達成すべき価値のあるものとしているか、努力を表明する際の表現の適切な方法、などの「努力」に関するスクリプトを起動させた結果であると考えられる。つまり、アメリカにおける「努力」のスクリプトでは「達成したかどうか」という結果の情報が必須であり、日本における「努力」のスクリプトでは「どのように努力したか」というプロセスの情報が欠かせな

いということであろう。これは同じ「努力する」という行為の捉え方や重視する面について、二つの文化間には違いがあるということであり、記述のみならず、実際の行動においても「結果を出す」ことに主眼を置いた努力のありかたと、「一生懸命やる」ことに主眼をおいた努力のしかたという違いになって現れてくる可能性があるだろう。

ところが、このような二文化間比較だけではその相違点のみが強調され、共通点は見逃されがちである。しかし、違いからのみ文化を捉えようとすると、その特徴だけがデフォルメされ全体像を見失うことになりかねない。さらに日米研究の結果はそのまま西洋と東洋の文化の違いとして解釈されやすく、たとえば同じアジア文化内における分散は無視される傾向にある。このような状況を打破するために東(2005)は、同文化内の下位文化集団の比較や三文化間比較の重要性を提言している。つまり、同じ国内においても、世代が異なれば文化的スクリプトのレパートリーが異なる可能性があり、また同じ東洋という文化圏に属する国の間においても、有する文化的スクリプトは異なる可能性がある。

そこで本研究では、日本と中国というアジア文化圏に属する二国を対象にし、「努力したこと」についてのスクリプトの特徴を分析することにより、「努力」のとらえ方にどのような差異と共通点があるのかについて検討することを目的とした。また学生と親世代という同文化内の年齢的な違いによって、「努力」についてのスクリプトが異なるかという点も検討することとした。

予 備 調 査

目 的

自由記述スクリプトの分析のための、コーディングカテゴリーを作成する。

方 法

1. 調査協力者

長野県の私立大学在籍の学生 32 名。年齢平均 27.6 歳 (SD = 12.6)。ただし、協力者は、20 代 (20 歳～26 歳) 26 名と 40 代以上 (41 歳から 66 歳) 7 名から構成され、2 つの世代グループに分けることができた。このため記述内容の世代差も網羅できると考えられた。

2. 調査内容

真島ら (1998) を参考に、「努力したこと」について、自由記述による回答を求める質問紙調査を行った。教示文は以下のようなものであった。

「ここ数カ月間に、はっきりとした目的をもってそれを達成するために一生懸命努力したことを、2, 3 思い出してください。そしてそれについて、何をしたか、なぜそのことをしたのか、またその時の気持ちはどうだったか、なるべく詳しく具体的に書いてください。」

A4 サイズの調査用紙に以上の教示文を掲載し、残りのスペースを解答欄とした。

3. 手続き

大学での講義を利用し、集団調査方式で調査票に記入させ、回収した。

結 果

真島ら（1998）の研究で用いられたカテゴリーを参考に、本調査の記述の内容を検討した結果、記述の内容は「活動内容」「誰のための活動か」「何のための活動か（動機）」「目的の記述のしかた」「結果の記述のしかた」「プロセスの記述の仕方」の 6 カテゴリーに分けることができると考えられた。また 6 つの大カテゴリーの中に、それぞれ具体的な下位カテゴリーがあると考えられた。

以上の結果をふまえて、コーディングカテゴリーを用意し、日本と中国の文化において妥当な内容になっているかについて、両国の研究者による検討を行った。最終的に分析に適用が可能であるとされたカテゴリーは、以下のものであった。

「努力したこと」コーディングカテゴリー

1. 活動内容：「努力したこと」がどのような活動に関することかを分類
 - a. 学業に関する活動：受験，試験勉強，資格取得など
 - b. アルバイト / 仕事に関する活動
 - c. クラブ活動や趣味に関する活動：ボランティア，旅行なども含む
 - d. 新卒学生の進路に関する活動：インターンシップ，就職活動など
 - e. 対人関係に関する活動
 - f. 身の回りのことや生活に関する活動：
 - g. その他
2. 誰のために：「努力したこと」は誰のための活動であったかについて分類
 - a. 自分のため
 - b. 家族のため
 - c. 友人のため
 - d. 所属集団のため
 - e. その他
3. 何のために（動機）：「努力したこと」の動機や目的について分類
 - a. 達成や競争のため：何かをなしとげる，優勝を目指す，合格するなど
 - b. 内発的動機づけ：活動が楽しいため，興味があるため，自分にとって価値のあることのため
 - c. 義務や役割遂行のため：ある立場上やった，仕事などの義務など
 - d. 報酬を得るため / 罰を避けるため：お金をかせぐため，単位を落とさないためなど
 - e. その他
4. 目標について：「努力したこと」の達成目標の記述について分類
 - a. 明確な達成基準・達成目標の記述：「大学に合格する」など
 - b. 漠然とした達成基準・達成目標の記述：「たくさん勉強する」など
 - c. 記述なし

*a, b にチェックがつかなかった場合は，必ず c にチェック
5. 結果についての記述：「努力したこと」の結果の記述について分類

- a. 結果についての記述：努力した結果どうなったかが明記してある
- b. 結果に対する気持ちの記述：嬉しかった，悲しかったなど情緒面の記述
- c. 結果に対する肯定的評価：自分のためになった，いい思い出になったなど
- d. 結果に対する否定的評価：後悔した，二度とやりたくないなど
- e. 結果についての記述なし

*aにチェックがつかなかった場合は，必ずeにチェック

6. プロセスの記述：「努力したこと」の過程についての記述の分類

- a. 過程についての記述：どのように努力をしたかについて記述がある
- b. 手段についての明確な記述：単語帳を作った，多くの人に呼びかけたなど
- c. 努力中の気持ちの記述：毎日苦しかった，無我夢中だったなど
- d. 過程に対する肯定的評価：効果的な方法だった，良くやったと思うなど
- e. 過程に対する否定的評価：もっと集中してやるべきだったなど
- f. 過程についての記述なし

*aにチェックがつかなかった場合は，必ずfにチェック

本 調 査 目 的

予備調査をもとに，日本と中国において，大学生とその親を対象にして「努力したこと」についての自由記述を求め，スクリプトの特徴を明らかにする。

方 法

1. 調査協力者

中国サンプル：北京にある2つの大学の学生83名とその親84名の計167名

日本サンプル：首都圏の国立大学1校，首都圏の私立大学4校，地方国立大学1校の大学生244名とその親104名の計348名

2. 調査内容

予備調査を参考に，「努力したこと」について，自由記述による回答を求めた。教示文は以下のようであった。

「ここ1,2年ほどの間(1年ほどの間)に，はっきりとした目的をもってそれを達成するために一生懸命努力したことを，2,3思い出してください。そしてそれについて，何をしたか，なぜそのことをしたのか，またその時の気持ちはどうだったか，なるべく詳しく具体的に書いてください。」

予備調査で使用した教示中の「ここ数カ月」という期間ではエピソードの想起が難しいと考えられたため，日本の本調査では「ここ1,2年ほどの間に」と変更した。さらに中国サンプルへの調査は，エピソードを想起する範囲を「ここ1年ほどの間に」と変更し，中国語に翻訳したものを用いた。

3. 手続き

日本、中国とも、学生への調査は集団で行った。親への調査は協力してくれる学生が調査票を家に持ち帰り、個別に記入するという形式をとった。中国では学生をとおして親に記入してもらった調査票を回収し、日本の親のデータは郵送による回収を行った。

結 果

1. コーディング

予備調査によって用意されたコーディングカテゴリーにそってプロトコルデータを集計し、カテゴリーに該当した内容があった場合1を、内容に該当しなかった場合0を割り当てた。

2. 単純集計結果の特徴

中国と日本、親世代と子ども世代の4グループに分け、各カテゴリーの内容について記述していた人数と、グループ内における回答者の比率について集計を行った。また、カテゴリー内における回答者の比率についてカイ二乗検定を行った。以上の結果を表1に示した。

カイ二乗検定の結果、「活動内容」のカテゴリーにおいては「学業」「アルバイト・仕事」「進路」「身の回り・生活」で有意な差があり、「対人関係」と「その他の活動」は有意差はみとめられなかった。「学業」については学生が多く記述しており（中国学生54%、日本学生64%）、「アルバイト・仕事」や「身の回り・生活」については親世代で記述が多かった（仕事：中国親43%、日本親31%；生活：中国親56%、日本親32%）。また「進路」については中国の学生の記述が多かった（16%）。

「誰のため」のカテゴリーでは、「自分」「家族」「所属集団」「その他」で回答に有意な差があり、「友人」のためは有意差がみとめられなかった。「自分」のために努力しているという記述は学生で多く（中国学生92%、日本学生89%）、「家族」のためという記述は親世代が多かった（中国親52%、日本親31%）。また、「所属集団」のためという記述は、中国の学生で少なかった（1%）。

「何のため（動機）」のカテゴリーでは、「達成・競争」「義務・役割」「報酬・罰」で有意差がみられた。「達成・競争」のためという記述は日本の学生で多く（76%）、「役割・義務」のためという記述は両国とも親世代が多かった（中国親35%、日本親41%）。また、「報酬・罰」は中国の学生と親が多く言及していた（中国学生43%、中国親30%）。

「目標の記述のしかた」については、全ての下位カテゴリーで有意差がみとめられた。「明確な目標」の記述は日本の学生が多かった（80%）。逆に「漠然とした目標の記述」は日本の学生で少なかった（13%）。また「目標の記述なし」は日本の親に多くみられた（20%）。

「結果の記述のしかた」については「結果についての記述」と「記述なし」だけで有意差がみとめられた。「結果の記述」は日本の学生で少なく（23%）、「記述なし」は日本の親で少なかった（52%）。

「プロセスの記述のしかた」については、「過程の記述」「手段の記述」「努力中の気持ち」「過程に対する肯定的な評価」「記述なし」で有意差がみとめられた。「過程の記述」については中国の学生は全員が言及しており（100%）、「手段の記述」については中国の学生と親の記述が多かった（中国学生98%、中国親83%）。「努力中の気持ち」については日本の親の記述が少なかった（46%）。

「努力したこと」についての回想的記述の分析：日中比較

表1 カテゴリーへの回答者数と比較

		中国学生	日本学生	中国親	日本親	
協力者数		83	244	84	104	カイニ乗値
活動内容	学業	45	156	1	7	161.5
		54%	64%	1%	7%	**
	アルバイト／仕事	14	10	36	32	73.9
		17%	4%	43%	31%	**
	クラブ活動／趣味	10	49	2	13	16.1
		12%	20%	2%	13%	**
	進路	13	2	0	0	53.7
		16%	1%	0%	0%	**
対人関係	4	3	3	7	4.8	
	5%	1%	4%	7%	n.s.	
身の回り／生活	2	10	47	33	137.0	
	2%	4%	56%	32%	**	
その他	3	4	3	4	2.2	
	4%	2%	4%	4%	n.s.	
誰のため	自分	76	217	31	55	127.2
		92%	89%	37%	53%	**
	家族	8	6	44	32	118.2
		10%	2%	52%	31%	**
	友人	1	1	1	0	1.8
1%		0%	1%	0%	n.s.	
所属集団	1	22	9	13	8.9	
	1%	9%	11%	13%	*	
その他	4	1	5	9	16.6	
	5%	0%	6%	9%	**	
何のため	達成／競争	30	185	4	19	180.6
		36%	76%	5%	18%	**
	内発的	13	64	19	33	6.4
		16%	26%	23%	32%	n.s.
	義務／役割	9	18	29	43	68.6
11%		7%	35%	41%	**	
報酬／罰	36	17	25	9	72.5	
	43%	7%	30%	9%	**	
その他	3	5	12	7	21.4	
	4%	2%	14%	7%	**	
目標	明確な記述	41	196	47	39	72.2
		49%	80%	56%	38%	**
	漠然とした記述	38	31	30	34	46.5
46%		13%	36%	33%	**	
記述なし	4	7	7	21	33.7	
	5%	3%	8%	20%	**	
結果	結果についての記述	24	57	27	41	8.1
		29%	23%	32%	39%	*
	結果に対する気持ち	14	36	20	26	6.9
		17%	15%	24%	25%	n.s.
	結果に対する肯定的評価	6	30	14	19	6.0
		7%	12%	17%	18%	n.s.
結果に対する否定的評価	1	8	2	2	1.3	
	1%	3%	2%	2%	n.s.	
記述なし	58	172	54	54	12.4	
	70%	70%	64%	52%	**	
プロセス	過程の記述	83	217	75	76	37.1
		100%	89%	89%	73%	**
	手段の記述	81	152	70	66	46.1
		98%	62%	83%	63%	**
	努力中の気持ち	70	187	56	48	49.0
		84%	77%	67%	46%	**
	過程に対する肯定的評価	31	50	12	10	23.8
37%		20%	14%	10%	**	
過程に対する否定的評価	3	11	0	1	5.9	
	4%	5%	0%	1%	n.s.	
記述なし	0	16	3	20	30.2	
	0%	7%	4%	19%	**	

3. 数量化 類による特徴の分析

各グループのプロトコルの特徴を比較するために、数量化 類を用いた分析を行った。6つの大カテゴリのうち、「活動内容」「誰のため」「何のため(動機)」の3カテゴリについては、努力したこと
の記述を求められた時に、書くに値する内容だと判断された主題の特徴を表していると考えられた。このため3カテゴリを「記述された内容の特徴」として同時に分析した。また、「目標の記述のしかた」「結果の記述のしかた」「プロセスの記述のしかた」の3カテゴリについては、努力したこと
の記述の際に、主眼を置く表現の様式を表していると考えられた。このため、「記述様式の特徴」として3カテゴリを同時に分析した。

数量化 類の結果、「記述された内容の特徴」では、努力が誰のためであったか<自分のため - 他者のため>という軸と、努力が何のためであったか<内発的 - 外発的>という軸で説明することが適当と考えられた。この2軸を使って各カテゴリの下位項目と4グループの関係性を 図1に示した。

記述された内容の特徴として、日本の学生は「学業」の「達成」について「自分自身のために」努力をしたという内容の記述が特徴であった。一方中国の学生は、「進路」について、「報酬や罰」に関連して努力を記述しているという特徴があった。

親世代では、日本も中国も大きな差はなく、両グループとも「対人関係」や「身の回り・生活」について「役割・義務のため」に努力をしたという記述が多かった。

また<自分のため - 他者のため>という軸で見ると、学生は自分のためという記述をしており、親世代は他者のためという記述をしているという特徴がみられた。<内発的 - 外発的>という軸で見ると、日本の方が比較的内発的な内容を記述し、中国の方が外発的な記述をしているという特徴がみられた。

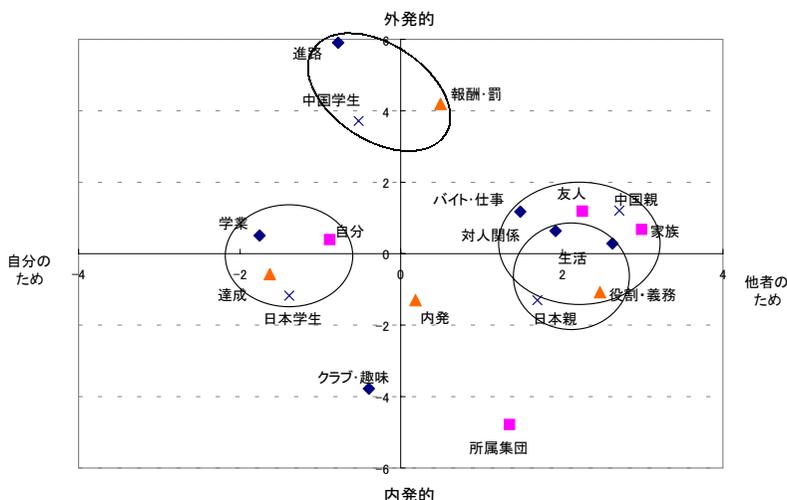


図1 「努力したこと」記述された内容の特徴：日中比較

「記述様式の特徴」では、結果の記述のしかた<結果の記述あり - 結果の記述なし>という軸と、プロセスの記述のしかた<プロセスの記述あり - プロセスの記述なし>という軸で説明することが適当と考えられた。この2軸を使って各カテゴリーの下位項目と4グループの関係性を、図2に示した。

記述様式の特徴としては、日本の学生は目標について「明確な記述」をしており「過程について」の記述や「努力中の気持ち」についても言及していた。中国の学生は「手段」や「努力中の気持ち」などを中心に記述をしていた。中国の親は「結果について」と「過程について」の両方の記述をしていることが特徴であり、日本の親は目標について「漠然とした記述」をしており「結果について」比較的多くの記述をしていた。

<プロセスの記述あり - プロセスの記述なし>という軸で見ると、中国の方がプロセスの記述をしており、日本の方がプロセスの記述が少なかった。<結果の記述あり - 結果の記述なし>という軸で見ると、親世代の方が結果の記述をしており、学生の方が結果の記述が少なかった。

しかしながら、「記述様式の特徴」は「記述された内容の特徴」に比べて4グループとも比較的に似た特徴を示しており、「努力」を表現する様式には大きな違いがないことが明らかになった。

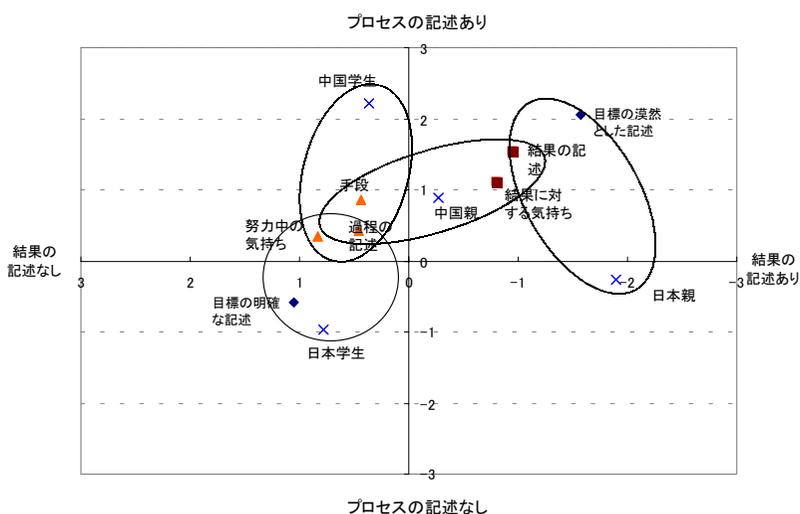


図2 「努力したこと」記述様式の特徴：日中比較

総合考察

本研究では「努力したこと」についての自由記述のスキプトの特徴を分析することで、文化間と文化内グループにおける「努力」スキプトの差異と共通点を明らかにすることを目的とした。

「努力したこと」として何を記述するかという内容については、日中を比較すると日本の方が内発

的な努力を記述するという特徴を示しており、中国の方が外発的な努力を記述する特徴を示していた。また、世代間で比較すると日中ともに学生の方が自分のための努力の記述をしており、親世代は他者のための努力の記述をしていた。ただし、各グループの特徴を個別に見ると、日本と中国の学生の記述の内容はそれぞれ独自の特徴を示していたが、親世代においては、両国とも記述内容は類似していた。

一方「努力したこと」をどう表現するかという記述様式については、日中を比較すると中国のほうがプロセスについての記述が多く、また世代間で比較すると両国ともに親の方が結果についての記述が多かった。ただし、各グループの特徴を個別に見るとグループ間の記述様式の特徴の差異は大きくはなく、どのグループも共通してプロセスの記述に重きを置いており、結果についての記述は少なかった。

以上のことから、日本と中国では、努力について何を記述するかという内容の選択に違いがあるが、努力についてどのように表現するかという記述様式は比較的類似しているのではないかと考えられた。つまり、「努力」するに値すると考えられているテーマや課題が両国では異なっており、「努力」を記述するときにもそれぞれの文化において蓄積されたスクリプトにそってテーマが選択されていた。一方、それをどう表現するかということに関しては結果よりもプロセス重視という点において両国で共通した価値の置き方をしており、起動されたスクリプトも似ているために、記述の特徴に差異が小さかったのだと考えられる。また、記述の内容の違いについては、学生は二国間の差が顕著であったのに対して、親世代においては二国間の差はほとんどなかったことから、同じ文化や社会に属している人の間でも、所属するサブグループの影響の方が大きい事もありうる事が示された。

つまり、ひとつの事柄に関するスクリプトはいくつかの側面から構成されており、一側面だけを取り上げて文化の差を強調することは適切でないことがわかった。また単純に二国間の差だけや世代間の差だけを文化の差として捉えることも適切ではないといえる結果であった。

ところで、努力として何を記述するかという選択には、スクリプトとして人が持っている枠組み以上に、実際に経験があるかどうかという影響が強いということも考えられる。たとえば、親世代では1年以内に「学業」について努力をしたという経験は少ないであろうし、一方の大学生では「アルバイトや仕事」について努力をしたという経験は社会人よりは少なくなるであろう。ただしその人の持つスクリプトは、何をすべきかという実際の行動の選択の際にも起動したにちがいない。たとえば、大学生であれば学業が本分であるから、「アルバイトや仕事」よりも「学業」を優先させようと考えた場合、そこには「何に対して努力すべきか」というスクリプトが起動したのだと考えられる。

今回分析した「努力したこと」についての記述は、実際の行動を動機づけた文化的スクリプトと、記述表現の選択をうながした文化的スクリプトを区別して扱うことはできなかった。本研究の結果は、以上のことをふまえた上で解釈する必要があると考えられる。

引用文献

- 東洋 1997 日本人の道德意識 道德スクリプトの日米比較. 柏木恵子・北山忍・東洋(編). 文化心理学 理論と実証. 東京大学出版.
- 東洋 1999 文化心理学の方法をめぐって - 媒介概念としての文化的スクリプト -. 発達研究, 14, 113 - 120.
- 東洋 2005 スクリプト比較研究の文化心理学的位置づけ. 発達研究, 19, 1 - 11.
- Bruner, J. 1990 Acts of Meaning. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- D'Andrade, R.G. 1992 Schemas and Motivation. In D'Andrade, R.G & Strauss, C. (Ed.). *Human motivation and cultural models*. The press syndicate of University of Cambridge.
- 北山忍 1997 文化心理学とは何か. 柏木恵子・北山忍・東洋(編). 文化心理学 理論と実証. 東京大学出版.
- 高崎文子 2003 達成動機付けに対する社会的影響について - 幼稚園児の観察事例から -. ソーシャル・モチベーション研究, 2, 13 - 30.
- 中谷素之 1996 社会的責任目標が学業達成に影響を及ぼすプロセス. 教育心理学研究, 44, 389 - 399.
- 真島真理・東洋 1998 作文課題による目標構造と将来展望に関する研究 - 「目的を持って努力したこと」の日米比較(中間報告). 発達研究, Vol. 13, pp. 106-118.

<付 記>

本研究は、文部科学省科学研究費補助金 基盤(B)「行為の理解、推測、評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト：日・米・中比較研究」(課題番号：14310062；研究代表者：東洋)の助成、および(財)発達科学研究教育センターの研究委託を受けて実施された。